

Computer Report

Vol. 58 No. 5 5月号 (通巻764号)

はじめの言葉

■森友／加計学園に関わる疑惑／混迷が深まる中、外交（外遊？）で一息、あわよくば外交成果を持って世論支持率のアップを期待した感のある安倍政権だが、成果は正直、期待はずれとなった。口先だけ「きっちり説明し国民の理解を得る」と言辞は明確にしていながらも、やっていることは、その真逆。悪ガキ仲間／子供の世界ですら通用しないやり口だ。世間知らずとしか言いようがないが、それにしても酷過ぎる。

■森友問題で国会喚問されながら、結局はほとんどすべての証言拒否、正当性を主張する部分だけは自己主張して、国民に対する官僚としての一切の義務を果たそうとしなかった佐川元理財局長（前国税庁長官）が特捜の事情聴取を受けている。これによって国会での真相解明／調査能力を超え、真に国民が納得する結果が導き出されることになるのか、予断を許さない。官僚による政権への付度が危惧されるなか注目される。

■モリカケ問題での安倍政権の対応ぶりで国民のウンザリ度合いが頂点に達している中、そうした国民のイライラを逆なでするように表面化した財務省トップのセクハラスキャンダル。相次ぐ財務省最高官僚たちの不祥事に、本題の真相究明／解決に支障が出ないか気になる。むしろ、官僚による官邸付度が極みとなって、これも官邸救援を目指しての騒ぎ起こしなのかと穿ててみたくなるほどのタイミングである。

■相変わらず現存する自民党内の派閥抗争のなか、モリカケ問題の余波で麻生財務相にかかる火の粉をふり払おうと、派閥幹部からは「麻生副総理が何か（悪いこと）したか？」という認識を示す言動も出ている。早い話、あくまでも元凶は安倍総理であり、もって自派に有利な派閥抗争展開の具にしようという姿勢だ。しかし財務省の相次ぐ不祥事、その任命／監督責任、加えて自身の言動から自らの去就が問われる状況に追い込まれている。

■総選挙が終わったばかりで、しかもダメ野党のおかげで獲得議席数では大勝ムードで充滿していることからか、自民党議員のタガ弛みな言動が相次いでいる。これもまたウンザリである。連休明けの解散総選挙も「選択肢のひとつだ」発言が出てきたりしている。まさに国民不在という意味で不祥事のひとつとしてカウントできる言動だ。改めてこうした選挙結果を生んだ国民一人一人の責任行動が思い返される。

■隣接の朝鮮半島では、分断された二つの政府による首脳会談が70余年ぶりに果たされ世紀を越えた展開となっている。元々の同一国家が、かつての形を取り戻そうという動きといえるわけだが、そのドサクサに紛れて、不当占拠している竹島問題を既成事実化されることを看過するわけにはいかない。度重なる国際機関での話し合いを逃避してきた韓国政府との交渉問題再開と北朝鮮の拉致被害者問題解決とを本格化しなくてはならない。

■常に姑息な言い訳／言い逃れ、その場凌ぎの政策を積み重ねることは、時間的経過、時代的経過の中で取り返しのつかない大きな後悔を生む。改めて言うまでもなく、肝に銘じた対応が必要だ。貧富差をますます拡大する経済政策や、非正規社員の醜悪な労働条件問題を忘れて、株価が少しばかり上がったこと、名目就職率が上がったことなど、近視眼的な評価ではなく、実質的／本質的な次元での政権／政府評価の時である。（藤見）